



Title	Cybernetics Imagined : Self-Control Technologies in Pre-Dickian American SF
Author(s)	小畠, 拓也
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44126
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	小畠 拓也
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 17461 号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科英文学専攻
学位論文名	Cybernetics Imagined : Self-Control Technologies in Pre-Dickian American SF (想像のサイバネティクス : ディック以前のアメリカ SF における自己統御をもたらす科学技術)
論文審査委員	(主査) 教授 森岡 裕一 (副査) 教授 玉井 暉 助教授 服部 典之

論文内容の要旨

本論文は 1950 年代に活躍したハインライン、アシモフを中心にアメリカ SF 小説における自己統御の問題を論じ、後に続くディックからサイバー・パンクと呼ばれる新潮流へと流れる系譜を丹念に考察した論文である。本文 6 章と序章、結論からなり、英文で 146 枚、400 字詰め原稿用紙に換算して約 350 枚から成っている。

アメリカの SF の「黄金時代」と呼ばれる 1940 年代から 1950 年代の作品群は、H.G. ウェルズに代表されるイギリス科学ロマンスの思弁性をヒューゴー・ガーンズバックらによる科学技術啓蒙の考えに接ぎ木することによって結実したものだと言える。そこにはウェルズ的思考実験と功利的な先進科学技術の積極的摂取の共存する世界がリアリズム的手法で描き出されている。それが 60 年代以降の SF を席巻するディック的世界との相違である。P.K. ディックが描き出すのは先鋭化したテクノロジーが日常のものと成り果て、日常的なリアリティが、既に失われた過去の夢として再現される、「まがいもの」の闊歩する世界である。ディックが描く「崩壊したリアリティ」というパラドックスめいた「リアリティ」はポストモダン的思考と合流し、1980 年代以降の SF における「サイバーパンク」運動のみならず、現代文学一般に少なからぬ影響を与えている。本論は、ディック以前、「リアリティ」の「真贋」についての論争が前景化する以前のアメリカ SF の代表的作家であるロバート・A・ハインラインとアイザック・アシモフの作品を中心に、リアリズム的構成を重視したいわゆる「ハード SF」の源流において既に、新たな「リアリティ」を構築する手段としてのテクノロジーが、ディック以降の文学状況との分水嶺の役割を果たすかに見えて、地下水脈のようにそこへと通じるものであることを検証しようとしたものである。

アメリカ文学史に見える積極的テクノロジー摂取の傾向と共通するところもあるが、ハインラインとアシモフに代表されるアメリカ SF に登場するテクノロジーの特徴として、単なる生活の利便性を高めるものと言うより「自己」を確立、確認していくための手段という性質を備えていることがあげられる。この自己確立、自己統御の志向は大きく分けて二つの方向性によって支えられている。一つはウェルズ以来の時間旅行による自らを起源とする「自己」の確立、今ひとつはメリ・シェリーの『フランケンシュタイン』によって開示された、「人間」という基礎的な定義を見直すことによる「他者」との対峙から見える「自己規定」である。前者については時間旅行譚とそこから派生する「歴史改変小説」の分析を通じて、ディック以前の思考法に基づく作品群にもアメリカ的「セルフメイド・マン」

の理想が提示されながらも、それが矛盾なく実現されることはあり得ないという意識が既に醸成されていることが示される。後者に関しては「ロボット」や「異星人」などのいかにも SF 的なものと極めて一般的な「自己」と「他者」、「男性」と「女性」と言う二項対立をもとにした他者表象のあり方が、テクノロジーの導入によって生み出される SF 的モチーフに見える関係性の中で、すなわち「自己」に酷似した「他者」の創造（ロボット、アンドロイド）、「自己」と「他者」の位置の交換（異星人との邂逅、交渉）、「自己」の中への「他者」の注入（脳移植、異星生物による寄生）などにおいて、攪乱されていく様が分析されている。そして、この二つの志向、歴史の操作、そして制御可能な空間へと世界のすべて（即ち、他者）を取り込むことによる、完全無欠の自己という「セルフメイド・マン」の生成を阻止する要素として、ディック以降の SF とも通底する「リアリティ」構築のパラドックスが時間的にも空間的にも埋め込まれていることが論証されている。

論文審査の結果の要旨

従来、あまり論じられることのなかったハインラインのほぼ全作品をくまなく分析し、同時代のアシモフと対比しながら、当時の科学思想のコンテクストにおいて幾つかの新しい切り口により分析した手口は新鮮で、この分野における貢献は大きい。しかも、ディックを分水嶺にして以後のアメリカ SF と分けて考えられることの多かった 50 年代の SF 小説の中に、すでに主体の崩壊というポストモダン的主題の萌芽が見られることを指摘している点は注目に値する。また、本論考は、たんに SF 小説の研究というにとどまらず、アメリカ文学に頻出する「セルフメイド・マン」のモチーフの SF 的変奏を指摘しており、キャノンの見直し、ジャンルの再構築が進む今日、新しいアメリカ文学研究の向かうべき方向性に対し、一つの有効な視点を示唆している。

他方、記述にやや繰り返しが多いことや、「セルフメイド・マン」とジェンダーの関連など、もう少し踏み込んだ記述が望まれる個所が散見されることも惜しまれる。しかし、これらの点は望蜀のごときものであって、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。